「動けば雷電の如く発すれば風雨の如し」

増山雄三

元治元年（一八六四年）六月五日に起った「池田屋事件」で、新選組が尊王攘夷を唱える多くの長州藩志士を殺害した事に、藩内で怒りが沸騰し、八月十八日夜、急進派の来島又兵衛が指揮した総勢二千人が、「御所」へ向かって京都郊外から攻め込んだ。

そして来島隊は、会津藩が守る「蛤御門」を突破しようと発砲したが、別の門で守備していた西郷隆盛率いる薩摩藩兵が駆けつけこれを阻み、天皇を巡る奪りあいの勝敗は、長州が惨敗し半日であっけなく決した。

後にこの激戦は、禁裏すなわち御所の門を攻め立てた事から、「禁門の変」と呼ばれたが、この時、来島は討死し長州勢の死者は二百五十人の多くに達し、同時に長州藩邸から出火し、周辺の民家約二万八千と東本願寺も

も焼失したため、京都は荒廃し御所から天皇も去り、敗れた長州は「朝敵」となり、幕府が長州征伐に乗り出すきっかけになった。

禁門の変が終わった後、第一次長州征討軍の参謀をつとめていた西郷隆盛は、長州藩に急進派藩士の処分を求めたが、当時、同藩では幕府に恭順する保守派が幕政を掌握し、その中の一人でもあった、岩国領主の吉川経幹は、幕府との調停役を務めていた。

この時期、長州藩の尊王攘夷の志士として活躍し、奇兵隊などの諸隊を創設し、長州藩を倒幕に方向付けをした人物として、「高杉晋作（一八三九～一八六七）」という男がいたが、この時、吉川が高杉の切腹や断首を検討していたことを示す文書が、岩国市立博物館の「岩国徴古館」で見つかった。

その文書は二つあり、一つは長州藩家老の志道安房が、征討軍の前線基地があった広島に向かう途中、岩国藩に立ち寄った際の「手控」で、そこには藩の処分案が記され、晋作

は高杉和助の名で「**切腹之部**」にあった。

二つ目は、晋作ら急進派七人の名が書かれた「**斬首状写**」で、そこに「姦吏と徒党を結んで、上を欺き、下を惑わし、君恩を忘れ、度々亡命すること不義不忠の至り」と彼の罪状を挙げ、「**斬首披仰付候事**」としている。

晋作自身は、禁門の変には参加しなかったものの、急進派の一人として処分が検討されたとみられるが、結局、長州藩は家老三人を切腹させ、急進派の四人を斬首して征討軍の武力制裁を回避した一方、出奔して福岡に潜伏した晋作は、下関で挙兵し藩政府を打倒したその後、同藩は第二次長州征討軍にも勝って、倒幕を主導していったのである。

それでも、長州藩政府が晋作殺害を検討したことを裏付ける史料は、これまではなかったので貴重なもので、もし晋作がこのような形で殺害されていたら、長州は討幕の中心勢力とはなりえず、明治維新の形も変わっていたのではないかと思はれる。

ところで、高杉晋作は、長門国萩城下菊屋横丁の、長州藩士だった高杉小忠太の長男として生まれ、十才のころに疱瘡を患うが、嘉永五年（一八五二年）に藩校の明倫館に入学し、柳生新陰流を学び免許皆伝になり、そのあと松下村塾に入り、松下村塾四天王の一人と呼ばれるようになった。

そして、安政五年（一八五七年）三月には藩命で江戸へ遊学したとき、師の松陰が「安政の大獄」で捕えられると、伝馬町獄を見舞ってその世話をするが、松陰が処刑されると萩に戻った二年後、海軍修練のため軍艦「丙辰丸」に乗船し、再び江戸へ渡った。

江戸では、神道無念流道場で剣術の稽古などをしていたが、その後、東北遊学を行なって佐久間象山や横井小楠と交流し、翌年五月には、藩命で幕府使節随行員として長崎から上海へ渡航した時、清が欧米の植民地になりつつあるのをみて、大いに影響を受けた。

長州藩では、晋作の渡航中に守旧派の長井

雅楽が失脚し、尊王攘夷派が台頭し、彼も木戸孝允や久坂玄瑞らとともに尊攘運動に加わり、江戸や京都で勤王と破約攘夷の宣伝活動を展開し、各藩の志士達と交流をした。

文久三年（一八五三年）五月、幕府が朝廷から要請され制定した攘夷期限が過ぎると、長州藩は関門海峡で外国船砲撃を行なうが、逆に米仏の報復に逢い惨敗、晋作はその和議交渉を任され、そこで両国は数多くの条件と共に「**彦島の租借**」を要求してきた。

晋作は、そのときほぼ全ての提示条件を受け入れたが、領土の租借については頑として受けつけなかったのは、「**領土の期限付き租借**」の意味が、清国で見聞した「**植民地化**」であるという事を、二十四才になったばかりの彼が、深く見抜いていたからであった。

幕府による第一次長州征伐が迫る中、幕府恭順の保守派が台頭するが、それに対抗する晋作は、自ら創設した奇兵隊と伊藤博文率いる力士隊と共に「**功山寺**」で挙兵し、恭順派

を排斥し、藩の実権を握った。

そして、再度の長州征伐に備え、晋作は土佐の坂本龍馬の仲介で、伊藤や桂とかねてより進めていた薩長盟約を結び、防衛体制の強化を進め、第二次長州征伐では海軍総督として「丙寅丸」に乗船し、戦闘指揮を執り幕府軍を敗走させた。

その後、将軍家茂が死去すると、肥後藩ほか九州の各藩が戦線から離脱し、残された小倉藩が城に火を放ち逃走したため、幕府軍の敗北は決定的となり権威は失墜し、これが大政奉還へと繋がっていったが、晋作は肺結核で療養中、慶応三年（一八六七年）の四月十四日に、二十九才の若さで死去した。

そんな生き様をした晋作だったが、小柄な男でそれを本人も気にし、直立して撮った写真は現存しないが、小柄な故に長い刀を好んで使用したため、その姿は、まるで刀を引きずって歩いているように見えたという。

師である吉田松陰は、彼の非凡さをいち早

く見抜き、剣術ばかりであまり学業に本腰を入れない彼を奮起させるため、同門の久坂玄瑞をべた褒めしたため、晋作はその悔しさをバネに、自身の持つ非凡さを発揮し玄瑞と肩を並べ、お互いを切磋琢磨しあったという。

それに、「男子というものは困ったと決していうものではない。困ったという時は死ぬ時である。どんな難局に処しても、必ず曲がり角があるので、何困らぬと言う気概でやっておると、自ずと通じるものである。断じて困らぬという気概でやっていれば、必ず道はつくものである」という父の教えを、晋作は生涯貫いてきた人生でもあった。

盟友だった伊藤博文は、高杉晋作の事を、「**動けば雷電の如く発すれば風雨の如し**、衆目駭然、敢て正視する者なし。これ我が東行高杉君に非ずや。中々勇敢の人で、創業的才藻には余程富んで居った」と評しているが、それこそまさに、彼を知る人の言葉である。

令和二年五月